

横尾 拓真（東京大学）

5月17日（土）10:40—11:20 大隈記念講堂小講堂 第二分科会

---

---

池大雅筆「榆枋園図巻」について

—中国の園林文化・別業図の受容と真景図への展開—

---

---

18世紀の京都で活躍した南画家・池大雅（1723—76）が作画を担当した「榆枋園図巻」（大徳寺）は、漢学者・巖垣龍溪（1741—1808）の居宅庭園「榆枋園」を描いた作品で、大雅による画は最晩年の基準作と位置付けられている。しかし、梅津次郎氏による図版解説（『國華』685号）を除けば、本画卷自体に対する詳細な言及は皆無に等しい。本発表では以下の諸点を中心に、中国絵画の受容と個性的展開という大雅画の特質を「榆枋園図巻」という具体例に沿って明らかにしていきたい。

まず、唐橋在家（1729—91）撰「榆枋園記」など、画卷に附属する題跋を参照することで、本画卷が中国の園林文化に関する知識を前提とした、巖垣龍溪を取り巻く文人たちの交流の所産であることを明確にする。園林を取り巻く中国文人の文化活動は、当時漢学者を中心に広く理解され、鳴海宿下郷家の小山園など、庭園の造営を通じてその世界は再現されていった。現実の居宅庭園が主題となり、文人たちの表象が積み重ねられていく。「榆枋園図巻」はそのような時代的志向を象徴する産物であり、詩文だけでなく画が伴った貴重な例でもある。

実際に本画卷は、明代の蘇州で制作された画卷形式の別業図に倣うものであることを次に指摘する。亭屋園林を俯瞰視で収めた画を中心に、篆題、園記、詩文等の書写が周囲を彩る画卷形式の別業図は、園林文化の象徴的産物として、蘇州の文人たちによって盛んに制作されていた。大雅自身、蘇州の別業図からは多大な影響を受けており、既に指摘される「楽志論図巻」（個人）と唐寅「事茗図巻」（北京故宫博物院）との近似をはじめ、その他にも「密林草堂図」（個人）は仇英「東林図」（台北故宫博物院）、『十便図冊』（川端康成記念会）は沈周『東荘図冊』（南京博物院）と、図様上顕著な類似を見せる。「榆枋園図巻」もその例に連なり、類似は図様に留まらず、構成上も完好な別業図と言えるものである。

一方、本画卷における大雅の作画は、蘇州の別業図という先例を意識しながら、眼前に実在する「榆枋園」の現実感を重視してもいる。画面中心に位置する邸宅は、複雑に入り組む二階建ての町屋を写生した風であり、中国文人のそれではない。この特色は、当代人物の居宅を画く際にも、中国画由来の定型化された図様を流用することが多い南画の中で際立つものである。中国文人による理想的世界への見立てを基本的枠組みとしつつ、同時に眼前の現実性を担保する作画の姿勢は、実景的要素を多分に含んだ蘇州の別業図への深い理解に基づくものであろう。加えて、南宗画という範とすべき様式を以て日本の風景を迫真的に描き留めようとした真景図の取り組みへと通じるものであり、中国絵画への深い理解と日本の景への深い観察が活かされた大雅真景図の代表作と位置付け得るものである。